



学校とは⑥子供の声

小学生は、トラブルが起こりやすい時期です。子供同士のトラブルには、①悪口②仲間外れ③暴力④嘘・ごまかし⑤いじめ 等が挙げられます。子供から「友達に悪口を言われた」などと打ち明けられたりすると、保護者としてとても心配になります。それは当然なことです。しかし、そこは冷静になって、子供の話にうなずいたり、アイコンタクトをとったりしながら、共感的な態度で話を聞くことがポイントになります。保護者には「イヤだったね。」「それは悲しかったね。」などと共感することが求められます。そして、とにかく、話をじっくりと最後まで聞きます。子供がトラブルに巻き込まれると、どうしても我が子の「主張」を中心に聞いてしまいがちです。しかし子供は、まだ客観的に物事を判断することが難しい場合があり、自分の都合のいいように伝えてくることもあったり、話の前後を切り取って、自分がされたことだけを伝えてきたりすることもあります。子供の話をそのまま鵜呑みにせず、「いつ」「どこで」「だれと」「何があったのか」など、実際に起こった客観的事実を受容的な口調で尋ねます。一流の翻訳家は、ある言語を機械的翻訳することは無く、書かれた言葉の背景にある文化や文脈を捉えて訳すそうです。子育ても同じで、子供の話をしっかり聞きながら、額面通りに受け取るのではなく、その背景にある心理状態も捉えていく必要はあると思います。そして「あなたが悪いんじゃないの?」などと一方的に叱ってしまうと、子供が心を閉ざしてしまうこともあるので注意しましょう。他にも、途中で話を遮ったり質問攻めにしたり責めたり否定したりすることは避けましょう。あくまで、子供の気持ちに耳を傾けながら、親子で解決策を考えます。そのとき、「私はこうしてきたからあなたもこうするといいね。」など、親の思い込み(価値観)を押し付けないようにしましょう。なるべく子供同士で解決できるよう、サポートできるようにします。解決策を一緒に考えたらそれで終わり、ではなく、その後の様子もさりげなく見守ることが大切です。

また、トラブルは起きていないものの、月曜や連休明けなどに下校後の子供が、学校や担任などの不平不満ばかり言う場合があります。休み明けは、のんびりモードから気持ちを切り替えなければならぬので余計にストレスがかかってきます。学校では緊張して脳も心も疲れてしまっているのです。登校渋りや不登校で、腹痛や頭痛、吐き気やめまいなどを訴えるというケースも少なくありません。しかし、子供が不満ばかりを言うことがマイナスではないのです。子供が伝えてくれた不満は、まずは受け止めることが必要です。「うんうん、疲れたよね」「イライラとしたんだね」「なんか、わかるよー」など、子供の不満の原因を言語化するとストレス解消の効果が上がります。不満を口に出すことで、自分の感情に気付き、現実を見つめることに繋がります。全てを出し尽くすと、案外すっきりとした顔に戻ることも多いようです。そのタイミングで、一緒に解決策を考えます。解決策はなるべく自分で考えさせ、それが難しい場合はいくつかの選択肢の中から自分で選ばせます。そうすることでその問題解決のために、頑張ろうと思うのです。「吐」き出すことで、マイナス面(ー)が減り、問題解決が「叶」うよう自律していくのです。そして子供は、①不平不満が減る②自分の気持ちに気付く③課題解決力を育むようになるという段階を踏んで成長していくものです。



教員も保護者も、「子供たちをよりよく成長させたい」という目的は一緒です。共同経営者として、互いに協力しながらやっていけるのが理想です。また、子供も、小さなトラブルから学ぶことがたくさんあります。楽しい経験を重ねることは、もちろん大切なのですが、マイナスに見えるようなトラブルも経験することで、悲しい気持ちや悔しい気持ちを味わいながらもその子なりに成長し、社会性や協調性を身に付けていきます。

ただ、子供同士のトラブルや困り感、教員への不満などで、元気のない様子や塞ぎ込む様子などが続くような場合は、学校に遠慮なく相談してください。子供の成長のためにできることを力を合わせて精一杯考えていきたいと思っています。